

Ought to についての一考察

刘込 亮

1. はじめに

ought to は「義務・必然」の意味を表すことから、should の用法と重なり合うことが指摘される。ought, should がともに 'owe' を語源としていることを考えれば、ought to と should の意味的類似性は肯定できる。しかしながら、ought to と should の意味的類似性とは、両者がどんなときにも書き換えができる等価性を示す根拠にはならない。

本稿のねらいは、to-不定詞を伴う特殊な法助動詞である ought to の語法的側面に焦点を当てながら、ought to の用法を通じて、should との違いを明らかにすることにある。

本稿における使用例文の検索については、基本的に The British National Corpus (BNC) を採用している。

2. ought to の意味特性

a. 義務的意味の ought to

義務的用法の ought to は、話者によって文の主語に課された「義務」を表し、日本語では「…すべきである」という意味になる。しかしながら、ここで述べる「…すべきである」という意味内容については、もう少し細やかな検討が必要であろう。

義務的用法の ought to は、「…すべきである」という意味から転じて、「…するほうがよい」「…するのが当然である」といった表現にも用いられる。話者の立場によれば、これらは「助言・勧告」といった控えめな表現であり、義務的用法の ought to には拘束力がないことを含意する。

コーパスより採取した例文によると、ought to は、命題内容に対する確信度が5割かそれ以下であることを表す法副詞(modal adverb)と共起することが多い。¹

(1a) But he ought perhaps to give more attention to another fact.

(2a) Maybe you ought to wait at least a day or so.

村田(1982)は、(1a)(2a)のような法副詞(perhaps, maybe)には I wonder whether を組み込むことが容認されると指摘する。

(1b) But I wonder whether he ought perhaps to give more attention to another fact.

(2b) I wonder whether maybe you ought to wait at least a day or so.

I wonder whether の組み込みにより、(1a)(2a)では、話者が命題内容に対して「不確かさ」を抱いていることがより明白となる。「不確かさ」は、話者によって文の主語に課された「義務」の拘束力を弱める要因になるであろう。

ought to が表す「義務」に拘束力がないことは(3)からもわかる。ought to を含む節を目的語にとる動詞は非叙実動詞(no-factive verb)で、弱主張動詞(weak assertive verb)の think が圧倒的に多い。²

(3) So I think we ought to congratulate him on that.

まず、非叙実動詞かつ弱主張動詞である think の特徴を明らかにしよう。非叙実動詞には、その補文 that S が真であるという前提(presupposition)は存在しない。弱主張動詞は、その補文 that S に対する話し手の判断を述べるにとどまる。これら think の特徴を踏まえて(3)の ought to を考察した場合、話者によって文の主語に課された「義務」には必ず遂行されるべきだという話し手の強い信念は含まれず、「義務」の不履行も許容されることが確認されよう。

以上より、「…すべきである」に代表される義務的意味の ought to は拘束力をもつわけではなく、控えめな表現であることがわかる。話者の立場からすれば、「助言・忠告・勧告」を表すことになる。広く知られている「…すべきである」という意味内容は、「どちらかといえば…すべきである」というものへ修

正が必要である。³

b. 認知的意味の ought to

認知的用法の ought to とは、ある事柄が必然的に事実であると考える話者の推量を表し、日本語では「…するはずだ」という意味になる。話者の推量とは、話し手が命題内容に対して蓋然性の査定をしていることを意味する。この項では、ought to が表す蓋然性について、もう少し細やかな検討を試みる。

(4a) Our guests ought to be home by now.

(Asakawa, T. and Kamata, S., 1986, p.176)

(4a) は (4b) に対応する。

(4b) There is enough reason to assume that our guests are home by now.

(4b) から、認知的用法の ought to が表す「必然」とは「高い蓋然性」を表すということになる。ただし、ここで述べる「高い蓋然性」とは、認知的意味の must がもつ「確実性」を表すものではない。⁴

(5) *Mary must be home by now, but she isn't. (Quirk et al., 1985, p.227)

(6) Mary ought to be home by now, but she isn't. (Ibid.)

(5) では、「メアリーは今ごろ家にいる」という事柄に対して、話し手は強い確信をもってると解せられる。その一方で、先行文を撤回するような but she isn't という発話は論理に一貫性を欠くため、非文である。では、なぜ (6) は許容されるのか。それは ought to の表す「高い蓋然性」が、must の表す「確実性」よりも下位層に区分されていることによる。

便宜上、蓋然性を「不可能」「可能」「確実」という3つの階層に大別しよう。(5) では、「メアリーは今ごろ家にいる」という命題内容は極性である「確実」、(6) では、同命題内容は中間層の「可能」に区分される。「可能」は、命題内容に対して真であることを前提としない。

以上より、認知的意味の ought to は推量の対象となる事柄が事実であることについての話し手の確信は含意せず、単に「高い蓋然性」を表す用法であることが確認できよう。無論、ここで述べる「高い蓋然性」とは、その命題内容が必ずしも真であることを保証しない。

3. ought to と should の違い

a. ought to と should の意味的類似性とは

ought to と should はともに「義務・必然」の意味を表すことから、should の代わりに ought to を用いてもよいことは広く知られている。

(7a) You should study more.

(7b) You ought to study more.

ought to と should の意味的類似性は、ought to に対する付加疑問として should が用いられることから確認できる。

(8a) If I can make more money, I ought to go ahead and make it, shouldn't I?

さらに、ought to を用いた問いや発言に答える場合は should が代用されることが多いと、Close (1975) は指摘する。

(9a) We ought to go and so ought [should] you.

しかしながら、(8a) (9a) は ought to と should が意味的類似性を示す根拠となる反面、両者の等価性を保証するものではないことも裏づける。should に対する付加疑問として、ought to を用いた (8b) や should を用いた発言に答える形で、ought to を用いた (9b) はいずれも非文となる。

(8b) *If I can make more money, I should go ahead and make it, oughtn't I to?

(9b) *We should go and so ought you.

以上のことから、ought to と should の意味的類似性は両者の交換可能性が高いことを示すものであり、両者がどんなときにも書き換えができる等価性を示す根拠にはならないことを見てとれる。

b. ought to と should が表す「義務・必然」の判断基準の違い

ought to と should の主語は、ともに1人称、2人称、3人称いずれの場合も可能である。

(10) I should give it time, darling.

(11) I ought to be worried.

(12) Someone should be on watch.

(13) Someone ought to take him home.

(10) (11) は I を主語にしていることから、「義務・当然」の判断基準は主観的であり、(12) (13) は someone を主語にしていることから、同判断基準は客観的であると言えよう。ought to と should に主語の制約がないことは、両者が表す「義務・当然」の判断基準に明確な指標がない印象を与える。しかしながら、同一文中に ought to と should が用いられる (14) では、

「義務・当然」の判断基準は *ought to* が客観的評価、*should* は主観的評価という一般原則を確認できる。

(14) Someone ought to do it, but why should I?

(14)における *ought to* は、話者が法律、規則あるいは諸事情から当然の理として「だれかがそれをすべき義務がある」と判断した上で、なぜそれをするのが自分であるのかという話者の主観に基づいて不満の意を表しているのが *should* であると理解すれば、論理の一貫性が保たれよう。

c. *ought to* の文体

ought to は *should* よりも口語的だという指摘がある。コーパスより採取した例文によると、*ought to* には、使用頻度の高いものから低いものまで含めて、以下のような *to*-縮約 (*to-contraction*) の形が確認できる。⁵

(15) They oughta pay for what they did.

(16) You oughtta get yourselves some backbone.

(17) There oughter be a law about him.

さらに、*ought to* の否定形を見てみよう。

(18) I ought not to have done that.

通例、*ought to* の否定は、(18) のような *ought not [oughtn't] to* の形をとる。だが、非標準用法ながら、*hadn't ought to* や *did not [didn't] ought to* という否定形も確認できる。

(19) Maybe I hadn't ought to talk about her.
(= Maybe I ought not to have talked about her.)

(20) You didn't ought to go ahead.

(= You ought not to have gone ahead.)

以上のことから、*ought to* は *should* よりも口語的、かつ、くだけた用法であることが確認できよう。

4. *ought to* のコロケーション

a. *ought to* と副詞

コーパスにて *ought to* と副詞が共起する文を採取すると、副詞は *ought* の前後に位置する機会が多いことを確認できる。(21) では、*ought* の前に位置する機会が多い副詞 (125例) を、(22) では、*ought* の後ろに位置する機会が多い副詞 (25例) を、(23) (24) では、*ought* の前後に同じくらいの割合で位置する機会が多い副詞 (前8例、後12例) をそれぞれ挙げる。⁶

(21) If his pains don't subside within a few weeks, he really ought to see the doctor.

(22) I ought never to forget about the kiddy.

(23) So Lewis thought he perhaps ought to mention it before going off duty.

(24) But we ought perhaps to give more attention to another fact.

(21)-(24) から読みとれることは何であるのか。最も注目すべきことは、*ought to* のコロケーションは並置 (*juxtaposition*) を前提としない点である。確かに、(21) (23) のように *ought* と *to* の並置を示す文がある反面、(22) (24) のように *ought* と *to* の間に副詞が位置し、並置が成立しない文も数多く存在する。

以上より、*ought to* のコロケーションはそれほど強い結びつきとは言いきれないことが確認できよう。

b. *ought to* の疑問文・否定文

ought to の疑問文・否定文が次のようになることは広く知られている。

(25) Tourism ought not to be a political matter.

(26) Ought I to know who she is?

(25) (26) はともに助動詞的用法である。すなわち、*ought to* を擬似的助動詞としてみなしているのである。この項では、*have to* の疑問文・否定文と比較することにより、*ought to* を考察したい。

(27) You don't have to go.

(28) Did she have to wait half an hour?

(27) (28) では、一時的状態を表す本動詞 *have* の用法に準じて、*do [did]* を用いている。⁷

(25)-(28) から確認できるのは、*ought to* の疑問文・否定文は、結果として *ought* と *to* の結びつきを弱めることになり、*have to* の疑問文・否定文は、依然として *have* と *to* の並置が保たれるという点である。

以上のことから、結論として次の2点が言えよう。

1. *have to* における *have* を助動詞とみなすことよりも、*have* と *to* の結びつきが優先される。すなわち、*have to* のコロケーションは強い。
2. *ought to* のコロケーションよりも、*ought to* における *ought* の助動詞的性格が優先される。すなわち、*ought to* の意味素性は 'ought + to' ではなく、'ought' である。

c. *ought to* における *to* の省略

ought の後の *to*-不定詞は、テキスト内に内在する意味関係を確認できれば省略される場合がある。

(29) 'You ought to paint your hall door.'

'Yes, I know I ought.'

省略とは文法レベルのものであり、(29)におけるto-不定詞は前方照応(anaphoric)によって復元可能である。この点において、oughtとtoの結びつきは保たれているという見方ができる。しかしながら、to-不定詞の省略はoughtの助動詞の性格が強調された結果であることを考慮するならば、ought toにおけるtoの省略とは、ought toのコロケーションがそれほど強い結びつきとは言いきれない事実を補強することにもなるであろう。

5. おわりに

本稿では、3つの章に分けてought toの用法について論じてきた。2章ではought toの意味特性である義務的用法と認識的用法について細やかな検討を加えた。3章ではought toとshouldの意味的な違いに焦点を当てた。一般的に、「義務・当然」の判断基準はought toが客観的評価、shouldは主観的評価である。また、ought toはshouldよりも口語的、かつ、くだけた用法である。4章ではought toのコロケーションについて、副詞、疑問文・否定文、省略とのかかわりから論じてきた。

本稿では、ought toの用法について、その全事象を論じきれたというわけではない。だが、ought toとshouldの違いは何か? こうした疑問には少なくとも答えることはできたのではないかと自負する。

注

¹ 法副詞は命題内容に対する蓋然性の査定を下す。コーパスにおいて、perhapsとought toの共起は20例、maybeとought toの共起は1例を確認。その他法副詞には、apparently, possibly, likely, probably, certainly, clearly, surelyなどがある。

² 法述部を構成する動詞は非叙実動詞と叙実動詞に分けられる。主張動詞(弱主張と強主張)とは非叙実動詞の下位区分にあたる(Hooper, 1975)。なお、think ... ought toの形は、コーパスにて50例を確認。その他、非叙実動詞とought toが共起する例としては、feel, believe, meanなどが挙げられる。

³ 勧告・忠告・義務を表す助動詞を、緊急度・必要度・強度が弱い順に並べると次のようになる。

You [might, could, should (ought to), had

better, must, will] see a doctor.

(Celce-Murcia & Larsen-Freeman, 1983)

ought toはhad betterよりも下位にあたる。

⁴ 認識的意味のmustについては、拙稿『Have toについての一考察』(2003) p.7を参照されたい。

⁵ ought toのto-縮約について、コーパスではoughtaは20例、oughttaは1例を確認。oughtaの使用頻度は高い。BNCにおいてoughterの使用は確認できないものの、COBUILDでは4例を確認。

⁶ その他、(21)型に分類される副詞にはcertainly, probablyなど、(22)型の副詞にはalways, onlyなど、(23)(24)型の副詞にはperhaps, surelyなどがそれぞれ挙げられる。また、oughtの前(または後ろ)に位置する場合が多い副詞とは、コーパスより採択した例文の比率にて分類、まれではあるが、(21)(22)における副詞の位置が反対となる例文も存在する。

(30) I think I ought really to say that it's not something that's particularly associated with opting out ... (5例)

(31) It never ought to the exercise never ought to have gone out Harry. (5例)

⁷ イギリス英語ではまれに、一時的な状態を表すためにhave toの疑問文・否定文が助動詞の用法となる場合(S have not to ... Have S to ...?)もある。

参考文献

- Asakawa, T. and Kamata, S. (浅川照夫, 鎌田精三郎) (1986) 『助動詞』 東京: 大修館書店
- Celce-Murcia, M. and D. Larsen-Freeman (1983) The Grammar Book: An ESL/EFL Teacher's Course. Rowley, Mass.: Newbury House.
- Close, R. A. (1975) A Reference Grammar for Students of English. London: Longman
- Hooper, J. B. (1975) On assertive predicates. ed. Kimball, J. P. p.4.
- Murata, Y. (村田勇三郎) (1982) 『機能英文法』 東京: 大修館書店
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. (1985) A Comprehensive Grammar of the English Language. London: Longman.